

社会・経済を比較する（その二）

盛田 常夫

過剰経済と不足経済

ウィーンのベルベデーレ宮殿近くに、ビュゼンドルフアー通りがある。ピアノ製造会社ビュゼンドルフアーの発祥の地である。この工場跡地は、現在、本社事務所を兼ねた展示場になっており、ピアノ製造工場はハンガリー国境に近いノイシュタットの町にある。

今ではスタインウェイに押されているが、それでもビュゼンドルフアーは世界を代表する高級ブランドピアノのメーカーだ。さぞかし大きな工場だろうと思っていたが、訪問して見ると、木工工場という風情なのだ。工場の技術者だけでなく、管理・販売スタッフを含めても、総勢二〇〇名弱。年間の製造台数が二〇〇台程度だから、売上の規模も知れている。

日本の静岡には、河合楽器のグランドピアノ製造工場（竜洋工場）がある。一〇万平方米の広大な敷地に、グランドピアノの大規模な製造ラインが設置されている。世界一大きいグランドピアノ工場だ。ここでは、車の製造と良く似た組み立てラインで、年間六千台以上のピアノが生産される。もちろん、従業員数もビュゼンドルフアーの比ではない。

注文生産と大量生産

この二つのピアノ製造会社を喩えてみると、ビュゼンドルフアーが中規模の家具屋さんとすれば、河合楽器は大規模製造業。家具屋さんで大企業では、ビジネス目標も作る製品も違っている。ビュゼンドルフアーが手作りの注文生産だとすれば、河合のそれは機械制大工業による大量生産。ピアノの品質も価格も違う。

ヨーロッパと日本の物づくり違いはピアノだけに限らない。ペンツやBMWを購入する場合には、何百とあるアクセサリーから予算と好みに応じて発注する。発注から納入まで三ヶ月から半年もかかることがある。これにたいして、日本ではそんな悠長な買い方・売り方をしない。最小限のアクセサリー込みでいくら、ということになる。一々、お客の細かな要望に応えていたのでは、手間暇がかかり、値段も高くなってしまう。だから、すべて一律のアクセサリーで、どれほど割引するかというビジネスになる。

もちろん、ペンツやBMWあるいはビュゼンドルフアーにしても、完全注文制で生産している訳ではない。不特定多数の顧客を対象にしながら、ある程度限定された顧客層にターゲットを絞り、代理店からの注文数を睨みながら、生産台数を調整している。他方、大量生産を行っている河合にしても、不特定多数の顧客を想定しているとはいえ、販売実績と市場動向を見極めながら、生産台数を決めている。

だから、完全注文制や完全不特定多数相手の大量生産制などは現実には存在しないが、生産の考え方や体制が、より注文制に近いのがヨーロッパの高級製造会社で、より不特定多数相手の大量生産に近いのが、日本の製造大企業だと言える。明らかに市場規模に規定された製造・販売戦略にもとづくビジネス

の違いだと言える。

市場均衡は虚構

中学の公民教科書に始まり、大学のテキストにいたるまで、すべての経済学教科書では需要と供給が一致するところで、受給量と価格が同時決定されると説明されている。しかし、現実はこのような形で決まる市場はまずない。教科書の説明が成立するためには、「供給（生産）者と需要（消費）者が商品や技術にかんして同等の情報を保有している」という条件が満たされていないからではないが、そのような条件が保証されている市場など、どこを探してもない。

「市場均衡」という概念は、市場の理想的状態を想定して考え出されたものだ。そういう理想的な基準を中心に、現実の市場が動いていると説明したいのだが、本当にそうなっているのか、経済学は証明できない（抽象的数理モデルの均衡証明は存在するが）。

実際に存在している市場は、大概が、売り手市場になっているか、買い手市場になっているかのどちらかだ。需要が殺到する、あるいは生産が限定されている場合には、売り手市場になり、注文生産に近い状態になる。売り手市場の場合には、売り手が製造量と価格の決定権を握り、生産者主権的な状態が生まれる。他方、供給過多の場合には、買い手市場になる。不特定多数の買い手をめぐって多数の生産者が販売を競うと、買い手市場に近い状態になる。買い手市場の場合には、買い手が価格決定の主導権をとり、消費者主権的な状態になる。

現実の経済は、過剰供給にあるか、過小（不足）供給にあるかのどちらかで、教科書が教える「均衡

状態など、どこを探しても存在しない。ということとは、現実の経済では、「過剰均衡」か「不足均衡」が平常的（ノーマル）な状態なのだ。こういう現実を分析するのに、正統派経済学の「均衡」理論が適切だろうか。

こういう問題提起をしたのが、ハンガリー人経済学者のコルナイ・ヤーノシュである。数理経済学で「一般均衡理論」が全盛時代を謳歌していた一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、この正統派理論にたいする挑戦の書を世に問うたのが、『反均衡の経済学』（日本経済新聞社刊、一九七五年。原書は、*Anti-Equilibrium*, 1970。この著作でコルナイは一躍世界の経済学界で知られる存在になり、一九八〇年に刊行された『不足の経済学』（*Economics of Shortage*, 1980）で、ハーヴァード大学経済学部にてニウア（終身在職権）をもつ教授として招聘されることになった（一九八四年）。

不足経済のメカニズム

コルナイによれば、社会主義経済を動かしている原理は、「不足」だと言う。経済計画を立案する人々は、市場の「不足」状態を重要な指標として、それぞれの経済部門の計画生産量を決定するのだと言う。たとえば、旧東ドイツの伝説的な乗用車トラバントは安くて人気があった。生産国の東ドイツでは、注文から実際の購入まで一〇年も待たなくてはならず、ハンガリーでも三〜五年の待機時間が必要だった。ハンガリーでは乗用車を生産していなかったの

合には輸入量を増やし、逆に短くなる場合には輸入量を減らすという形で、販売量を調整していた。

このような極端な売り手市場にある商品の場合、生産者は技術革新の必要性を感じない。常に一〇年先までお客が並んでいれば、何の経営努力も必要ない。実際、トラバントは一九五〇年代のモデルで、体制崩壊にいたる三〇年間、ほとんどモデルチェンジのない車種だった。

コルナイは、社会主義経済はほとんどの市場が売り手市場になっていて、不足状態が一般化した「不足経済」だと規定した。これがコルナイの不足経済論である。このような経済では多くの商品購入で、消費者は行列（待機）しなければならない。当然、経済全体が生産者主権で機能し、売り手や官庁が威張る。このような経済では商品在庫が必要なく、生産者が楽できる経済だ。生産者とは対照的に、消費者は商品の入手に苦労する。

同じ一人の人間は生産者と消費者の二重の役割を担うから、工場の管理者として威張っているも、一人の消費者として苦労するという矛盾した現実の中に生きる。こういう経済社会ではコネによる商品の横流しが蔓延する。それが腐敗の温床になる。

今のハンガリー社会でも、不足経済時代の名残が見られる。未だに生産者（公共サービス供給者）や官庁の中には、勘違いして威張っているところがある。人を待たせるのも平気というのも、不足経済時代の名残なのだ。ハンガリー人が辛抱強く行列で並んでいるのも、不足経済時代の行動慣性なのだ。

ノーベル経済学賞

コルナイの『不足の経済学』は旧ソ連圏のほぼすべての国で翻訳され、経済学者に大きなインパクト

を与えた。ソ連では一般刊行は許可されなかったが、専門家の間の検討にロシア語版が作成された。他方、中国ではコルナイのすべての著作を翻訳・出版し、「経済体制改革」への理論的指針に祭り上げ、中国の市場改革イデオロギーとして利用した。こうして、コルナイ理論は体制転換にいたる経済改革のバイブル的な著作になった。

一九九〇年から数年にわたり、コルナイがノーベル経済学賞を受賞するという推測が広がった。歴史的な社会変動への経済理論面での貢献が評価されるだろうという予想であった。ノーベル経済学賞が設立されてから、経済理論が現実へのインパクトをもった事例などなかったから、多くの巷の経済学者がそう考えた。筆者も、日本の新聞社の依頼に応じて、二年にわたり受賞時のコメントを準備してスタンバイしていた。コルナイ本人もその気だった。それからもう一〇年以上も時間が経ったが、何の音沙汰もない。この間に、ハンガリー人のハルシャーニイが、ゲーム理論への貢献でノーベル経済学賞をとってしまった。

今、ノーベル経済学賞は応用数学の定理を証明したような小物の数理経済学者に贈られる傾向にある。経済学がイデオロギーと「科学」との相克の中で苦しんできたことから、「数学的に証明できるもの」だけを受賞対象にしているように見える。これはまた別の問題をひき起こしている。「純粋数学にノーベル賞がないのに、経済学に名を借りた応用数学にノーベル賞を贈るのは詐欺ではないか」、という批判が数学者の間で強い。純粋数学から落ちこぼれた者が数理経済学という応用数学をやっていると、数学者は考えているのだ。それは間違っていないだろう。